

論文内容の要旨

申請者 光橋 さおり

Mitsubishi, Saori

論文題目

はじめて教育職に就いた看護系大学に所属する助教の経験
：職業的アイデンティティに焦点を当てて

Experiences of Novice Assistant Professors: Focus on Professional Identity

I. 序論

近年の看護系大学の急増によって看護教員が不足し、教育の担い手として大学院博士前期（修士）課程を修了後に看護系大学教員となる者が増えている（日本看護系大学協議会, 2018a）。海外の先行研究によれば、これまで臨床看護師として働いていた看護系大学教員初任者は、教員としての準備が不十分なまま教育活動を開始し（Siler & Kleiner, 2001）、「予期・期待」、「方向感覚の喪失」、「情報探索」、「アイデンティティ形成」の4段階を経て臨床看護師から看護系大学教員へなっていくと言われている（Schoening, 2013）。

一方、日本の看護系大学教員のなかでも看護系大学に所属する助教は、全員が臨床看護師から看護系大学教員へ役割移行し職業を継続していくわけではなく、進路選択や職業継続に迷う人もいる。このような状況にある看護系大学に所属する助教の職業的アイデンティティは、果たしてどのようになっているのだろうか。

これまでの看護師や看護教員を対象とした職業的アイデンティティに関する先行研究は、研究者の視点から看護師や看護教員という特定の職業と自己との統合状態を捉えた研究であり、将来のキャリアに可能性を秘めた存在である助教の職業的アイデンティティを十分に把握できていない可能性があると考えられた。そこで本研究では、職業的アイデンティティを「助教がどのように職業を知覚し、どのように自己に位置づけているのかという主観的な感覚」と定義し、助教たちの視点から探究したい。彼らの視点から助教の経験の意味が明らかとなり、助教の経験を理解する新たな視点を示すことができると考える。

II. 目的

本研究の目的は、はじめて教育職に就いた看護系大学に所属する助教が、看護系大学入職後どのような経験をしているのか、特に助教の職業的アイデンティティ形成に関わる経験に焦点を当てて明らかにすることである。

III. 方法

研究デザインは、質的記述的研究である。研究参加者は、看護学士課程教育のみを担当している助教で、かつ看護系大学院または医療系大学院を修了し最終学歴は修士号の者で、かつ非常勤講師や専門学校教員等の教育経験がない者とした。データ収集は、半構造化イ

インタビューを原則2回、必要に応じて3回目を実施した。データ収集期間は、2019年1月から2019年4月であった。データは、カテゴリーやコード化の単位に切片化せず、参加者内、参加者間に示唆的なパターンや関係を見失わないように完全に語りの文脈を保ち、職業的アイデンティティの観点から質的帰納的に分析した。参加者の経験を時間経過に沿って再構成し、参加者の特徴的な経験を一つの局面とした。局面毎に職業的アイデンティティ形成に関わる経験を表す小テーマをつけ、参加者毎にその人の看護系大学入職後からの職業的アイデンティティ形成に関する大テーマをつけた。なお、本研究は、日本赤十字看護大学研究倫理審査委員会の承認（研倫審委第2018-074）を得て実施した。

IV. 結果

研究参加者は、30歳代前半から40歳代前半の教員経験3～4年目の任期付きの助教5名で、臨床経験は4～14年で、過去にプリセプターや実習指導者の役割を担い、全員が大学院修士課程研究コースを修了していた。研究参加者の氏名は全て仮名を用いた。小テーマを【 】で示し、大テーマをゴシック体で示した。なお、参加者の語りを直接引用した箇所は「 」で示した。

1. 教員の立ち位置を模索していた深川さん:入職直後、深川さんは、はじめて担う事務作業等の助教の業務に驚くとともに、それらがうまく進まないことに【看護師とは異なる世界で手がかりがなく不確かな状況が続】くと感じていた。また、【看護師であるのに「先生」とよばれることに違和感を抱】いていた。さらに、実習場での教員の立ち位置がわからなかった深川さんは、【看護師の思考が勝手に入り込み、教員ではない感覚を抱】いていた。【教員としての自信がマイナスにな】っていた深川さんであったが、上司教員から学生の見方を提示され、学生と関わるなかで【教員の立ち位置を模索し学生と一緒に悩めることが「楽だ」と感じるようにな】った。深川さんは、【「何でも知っていて優秀な」先生像に固く縛られていたことに気づ】いた。

2. 「看護師プラスアルファ教員」が少しずつできてきた土井さん:入職直後、土井さんは、事務作業が意外と多いという【演習・実習以外のイメージができていなかった教員の仕事に驚】いていた。しかし、上司教員がはじめて担う業務を確認してくれたため、【教員は相談しやすく守られている中で働ける仕事だと感じ】ていた。4年間で大きく成長する学生の姿を見た土井さんは、学生を長い目で見られるようになり、【学生との関係性の深化を実感】していた。【「ベースに看護師プラスアルファ教員」が少しずつできて】きたと感じていた土井さんであったが、【専門領域を決められる教員と子育てをしやすそうな臨床看護師の間で迷】いがあり、育児をしながら働く環境を整えられるかどうか次第だと考えていた。

3. 研究費を得て教員として留まり、教員としての軸を模索している千葉さん:2年目に第1子を出産し職場復帰した後、仕事と子育てで余裕がない状況にあった千葉さんは、【教員・看護師・母親として至らない自分に直面】していた。さらに【代替がきかない教員の働き方に直面し臨床看護師への転職を考え】ていた。しかし、【周囲からの理解と研究費

を得て教員として留まる】ことにした。また、学生は変化していく存在であると、これまでとは違う視点で学生を見られるようになった千葉さんは、【子育て経験を通した学生への視点と関わりの変化を実感】していた。しかし、現在はまだ【「教員としての軸」を摸索して】おり、他の教員を手本にしたい時期だと語っていた。

4. 教員役割を果たすために試行錯誤し学生をケアする感覚に落ち着いた江口さん:入職当初、江口さんは【「教員は何をする人か」曖昧なまま手探りで役割を担】っていた。しかし、学生が安心して実習できる環境を整えることが教員の役割であると捉え、【臨地実習での教員役割を理解し役割を果たすために試行錯誤】していた。【教員は看護師に比べ目に見える成果を実感できないため「さみしい」】と感じることがあったが、教員と学生との関係性は、看護師として患者の人生をサポートしていることと感覚的には似ているため、【学生をケアする「看護師のような感覚」】を抱くようになった。一方で、研究者としての能力や研究時間の確保といった問題に直面し、【研究者として生きていく覚悟がまだできないと感じ】ていた江口さんは、次の進路として臨床看護師に戻る決意をし、教員経験を活かして臨床看護師の育成に関わりたいと考えていた。

5. 助教の仕事を引き受けていったが全く違う仕事に関心を持った後藤さん:入職当初、後藤さんは、講義や演習、実習だけでなく大学運営にも関わる機会があることに【「今までとは全然違う世界にきたという感覚」を抱】いていた。一方、「先輩看護師が新人看護師を指導する意識」であった後藤さんは、学生の患者への対応や看護師との接し方を厳しく見て指導をしていた。しかし、後藤さんは、同僚教員の学生との関わりが自分とは異なっており、臨床と基礎教育では「指導の角度が違う」ことに気づき、【「看護師を育てる」から「看護の考え方を養う」教育へ考え方を転換】していった。学生の学びをサポートする【臨地実習での「縁の下の力持ち的な役割」を引き受けてい】った後藤さんは、【「根底に看護師としての自分」があり「教員としてふるまう」】のであった。一方、研究活動を続けていくことは気が進まなかった後藤さんは、【助教の仕事に関心を持ち続けることができず、全く異なる仕事に関心をも】ち、次の進路として行政職を選択していた。

V. 考察

1. 助教の職業的アイデンティティ形成の特徴

これまで患者へのケアや医療チーム内の調整を役割とし、日々の変化への対応を求められる臨床看護師として認められてきた研究参加者は、教育、研究、社会貢献、管理運営を役割とし、行事の年間計画をその職務の中心とする大学教員の一人となったことで、臨床看護師としてのアイデンティティが大きく揺り動かされていた。このことは、過去に形成したアイデンティティでは対応できないことを意味し、新たなアイデンティティを形成しようとする契機となっていたと推察される。

また、本研究では「学生に教える」ということが、助教の職業的アイデンティティの中心に位置づいていることが明らかとなった。この職業的アイデンティティは、教員としての仕事や学生との関係性を捉えたものであると考えられた。この職業的アイデンティティ

形成には、臨床看護師としての視点と教員の視点とは異なることに気づき、先輩教員や上司教員の視点を内在化しながら学生との関わりを試行錯誤し、学生との関係性の深化を実感するといった経験を重ねていくことが重要であると考えられた。

一方で、研究者としてのアイデンティティを形成していくことは、研究参加者にとって難しい課題として捉えられており、大学教員を継続するか否かを選択する動機となっていた。

2. はじめて教育職に就いた看護系大学に所属する助教の経験の意味

任期付きの助教である研究参加者は、次の進路を選択する必要に迫られていた。その中でも女性特有のライフイベントを経験している者は、仕事をどのように自己に位置づけ、育児と仕事をどのように両立していくのかといった生き方を問い直さざるを得なかった。しかし、本研究参加者は、自己の関心はどこにあるのか、今後どのように働いていきたいかといった職業的アイデンティティを問い直し、主体的に進路を選択していたと推察される。

また、本研究では、今後の進路として教員以外を選択していた研究参加者がいたが、数年間の教員としての経験を肯定的に意味づけ、次の経験につなげようとしていた。研究参加者の職業的アイデンティティは、臨床看護師と教員との違いを感じながら揺り動かされ、教育者と研究者といった複数の役割間で葛藤していた。このような経験をとおして摸索し、自分自身を再定義するなかで、看護職者としてのアイデンティティが広がり続けると考えられた。

VI. 結論

研究参加者は、大学組織の一員となったことで、臨床看護師としてのアイデンティティが大きく揺り動かされていた。一方で、学生との関わりの中なかで、教員の視点を内在化しながら「学生に教える」というアイデンティティを形成していた。また、任期付きの助教である本研究参加者は、次の進路選択を迫られ、職業的アイデンティティを自ら問うことで主体的に進路を選択していた。しかし、研究参加者個人の努力に委ねられている場合が多いことから、看護系大学教員初任者に対して、大学教員の職務や役割についてのオリエンテーションや新しい職務に対するフィードバック、キャリア支援を目的とした個別の面接等の支援システムの充実が必要であると考えられる。